



モンゴル帝国に立ち向かった人々 ～ロシアと中国～

第14期社会工学研究会
アジアダイナミズム班

学部生 : 野中、高、中西、大竹、村上、日高
大学院生 : 杉、須貝、小柳、福満
指導教員 : 金美徳、水盛涼一

2017年～2022年 論文のテーマ 振り返り

年度	タイトル	ページ数
2017	モンゴル帝国のユーラシア興隆史	107
2018	モンゴル帝国の興隆と衰退	244
2019	モンゴル帝国と朝鮮半島	84
2020	パンデミックのユーラシア史とポストコロナ	118
2021	倭寇とモンゴル帝国史～海洋の渡海民と大陸の遊牧民～	106
2022	華人華僑とモンゴル帝国史	81

659ページ

2021年度・2022年度は、モンゴル帝国の影響を受けて周辺地域で発生した社会現象としての倭寇や華人華僑を研究した。

240ページ

2017年度～2021年度の論文が書籍として出版されました



研究目的・方法

✓ アジア班が目指す論文は、歴史の視点から「**現代的意義**」を見出す

✓ 「**文献研究とフィールドワーク**」を中心に研究活動を行う

✓ フィールドワークは**モンゴル、ロシア、中国の研究者**にヒアリングを行う

2023年度のテーマ

モンゴルに立ち向かった人々 ～ロシアと中国～



モンゴルによる
ロシア支配

ロシア

出典：宮野裕『「ロシア」は、いかにして生まれたか——タタールのくびき』
(NHK出版、2023年6月)



中国秘密結社による
モンゴルへの抵抗

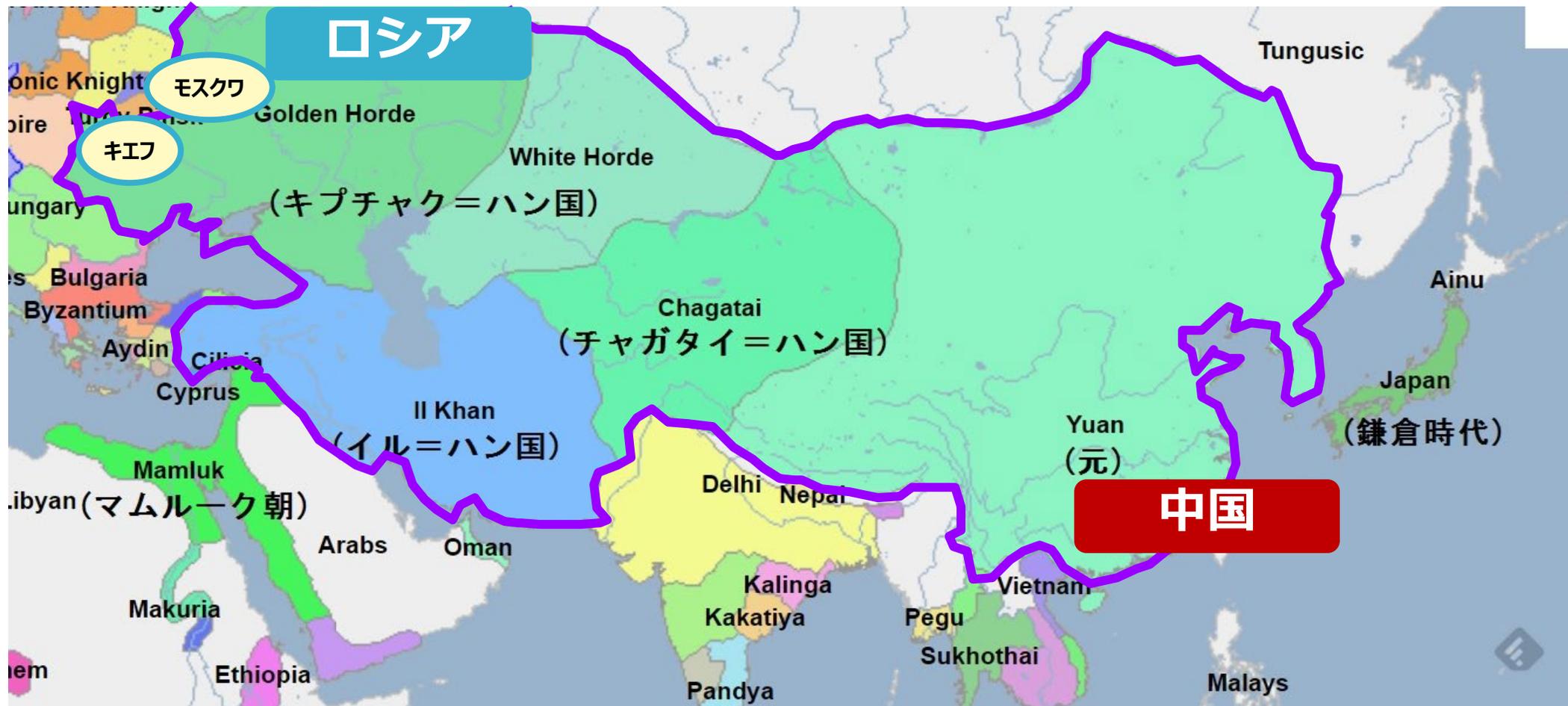
中国

出典：劉福通起義
<https://www.mdhist.com/plebeian/4128/>

地理：モンゴル帝国のアジア統一（1300年頃）

13-14世紀

1250年 モンゴルによるルーシ支配が徐々に確立(徴税・徴兵)



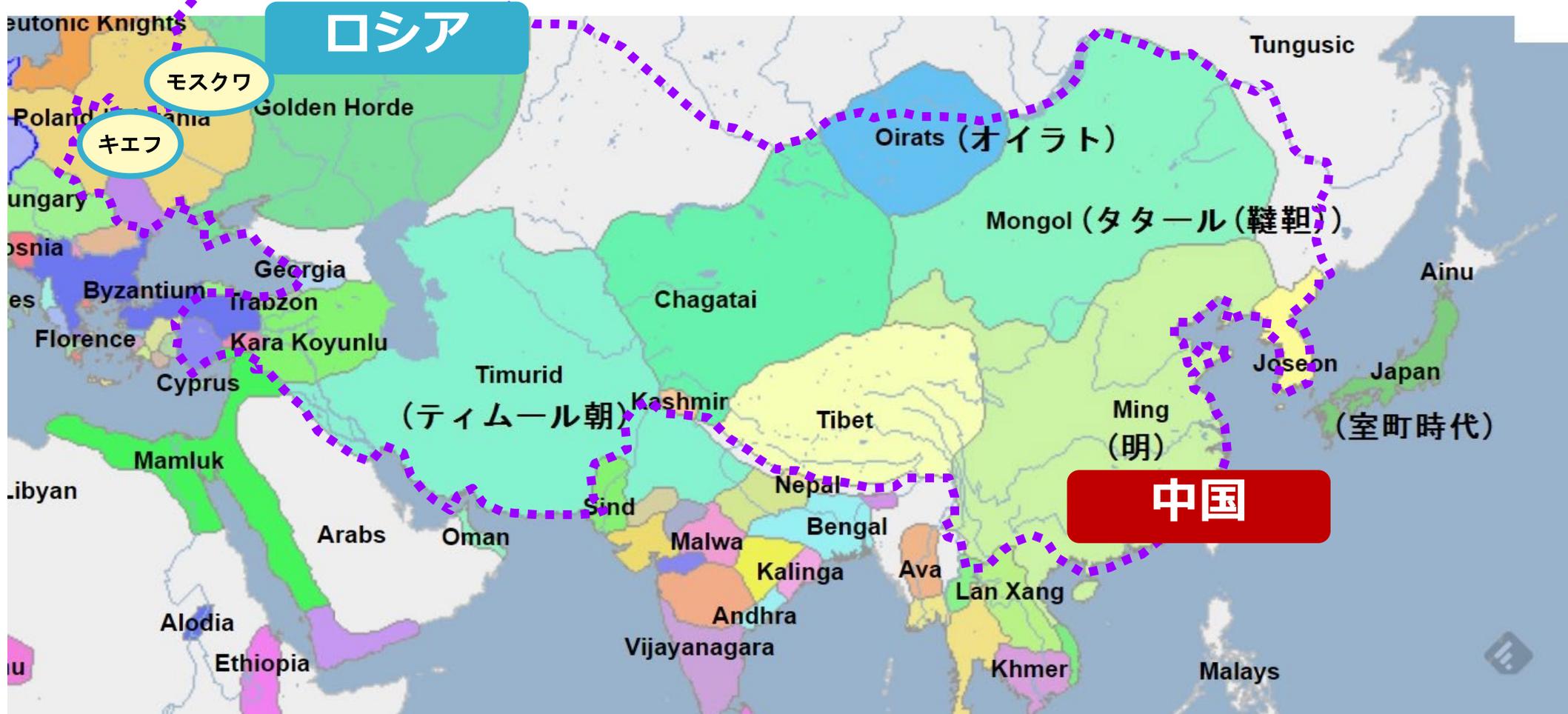
出典：<https://jugo-blog.com/history-of-asia2>

地理：モンゴル帝国が衰退・明の時代（1400年頃）

15-16世紀

1480年 ロシアのジョチ・ウルスへの貢納が終了
モンゴルのロシア地域支配が終了 (240年間)

1351年 紅巾の乱
1368年 明 建国

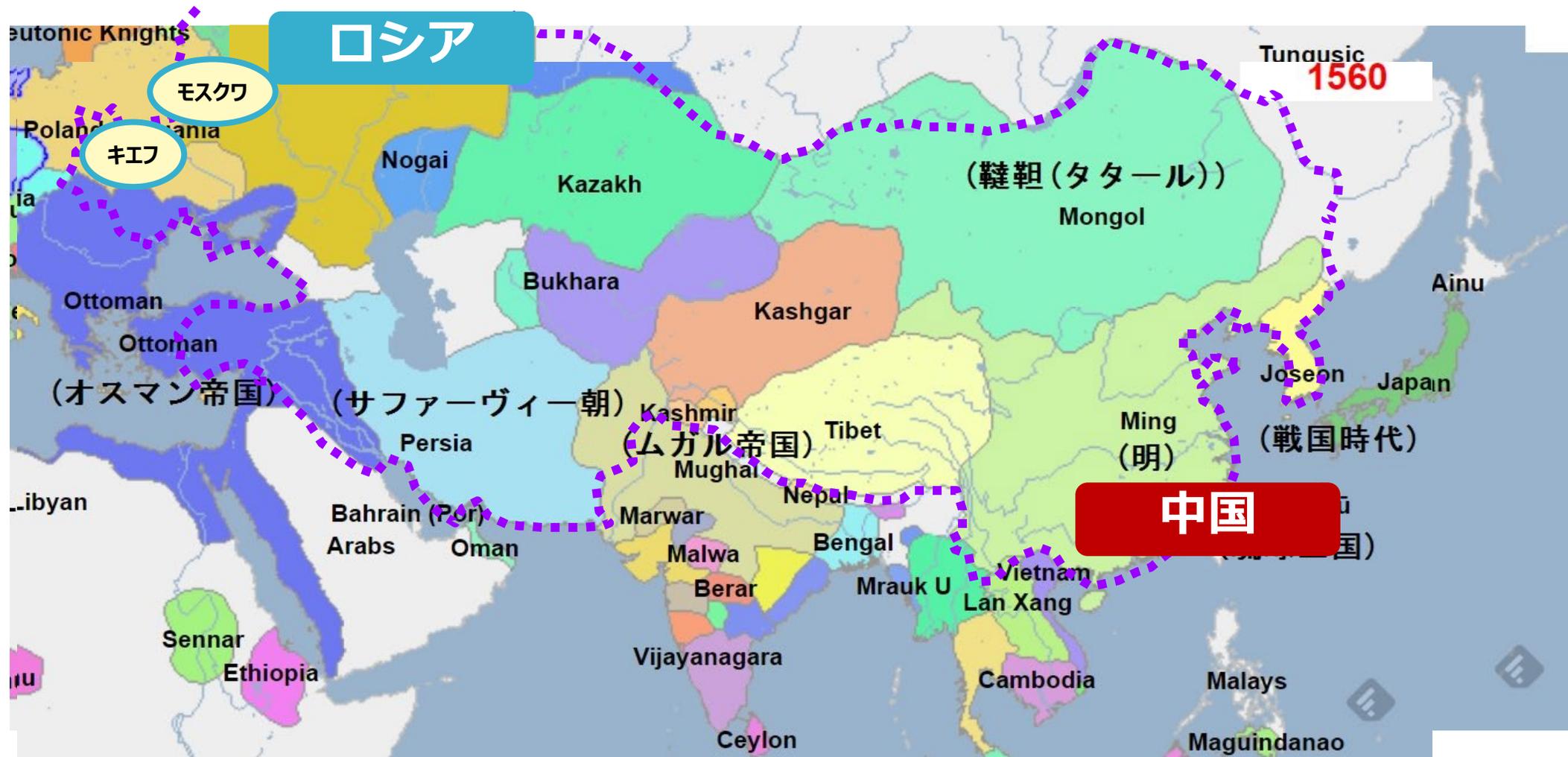


出典：<https://jugo-blog.com/history-of-asia3>

..... モンゴル帝国のアジア統一時の領域

地理：イラン・ムガル・オスマン（1560年頃）

15-16世紀



出典：<https://jugo-blog.com/history-of-asia3>

..... モンゴル帝国のアジア統一時の領域

地理：清の時代（1700年頃）

17-18世紀

1616年 清 建国



出典：<https://jugo-blog.com/history-of-asia3>

----- モンゴル帝国のアジア統一時の領域

地理：現代（2019年）

21世紀



出典：<https://jugo-blog.com/history-of-asia3>

..... モンゴル帝国のアジア統一時の領域

歴史年表：モンゴル・中国・ロシア（・日本）

年代	モンゴル・中国史	中国宗教史	ロシア史	日本史
8-13世紀	705年 武則天失脚,唐の復活 755年 安史の乱 1206年 モンゴル建国 1271年 地名を 元 に	694年 マニ教が中国に伝来 1200年代 南宋末頃、マニ教と弥勒信仰が習合した 白蓮教 が生まれる ※元時代は布教の公認を受けるも何度も禁止令	1223年 モンゴルが ルーシ攻撃開始 1227年 チンギス・ハーン没、ジョチ・ウルス(キプチャク・ハン国)を孫バトゥが引き継ぐ 1236-42年 バトゥの率いる軍がヨーロッパ侵攻 1250年 モンゴルによるルーシ支配が徐々に確立 (徴税・徴兵)	894年 遣唐使廃止 1274年 文永の役 1281年 弘安の役
14-16世紀	1305年 元が5つに分裂 1368年 明 建国 1383年 明 海禁政策開始 1567年 明 海禁を緩和	1338年 白蓮教の反乱が起こるも鎮圧 1351年 紅巾の乱 (紅巾軍配下に 朱元璋 がいた) 1368年 朱元璋が元を倒し 明の皇帝 になるとともに白蓮教を禁止	1480年 ロシアのジョチ・ウルスへの貢納が終了 モンゴルのロシア地域支配が終了 (240年間)	1350年 倭寇が高麗の各地を襲う(倭寇の活動が激化) 1419年 応永の外寇 1467年 応仁の乱 1587年 豊臣秀吉によるバテレン追放令
17-18世紀	1616年 清 建国 1644年 明が滅亡 満州族である清の時代へ	1600-1700年代 清政府は取り締まるべき宗教を内容にかかわらず「白蓮教」とまとめて呼称し弾圧 1796年 嘉慶白蓮教徒の乱	1700年 クリミア・ハン国への貢納が終了	1639年 鎖国 1612年 キリスト教禁止令
19-20世紀	1911年 辛亥革命 1912年 清が滅亡 中華民国誕生			1858年 米修好通商条約 1868年 五榜の掲示 1910年 韓国併合 1972年 日中国交正常化

モンゴルに立ち向かった人々：2つの視点

ロシア視点

- モンゴル帝国に支配された周辺地域の一つに「ロシア」がある
モンゴルが与えたロシアへの影響に対する様々な見方が存在
 - ☞ 現代のロシアの行動を読み解くヒントとしての歴史的な影響があったのか？

中国視点

- モンゴル帝国(元)を滅ぼしたのは、白蓮教を基とする秘密結社「紅巾党(徒)」だった
 - ☞ なぜ宗教集団の秘密結社だったのか？
 - ☞ モンゴル族・漢民族という民族対立はあったのか？
 - ☞ 元の統治制度は、その後に続いた明や清にどのように影響したのか？

第1部 モンゴル帝国とロシア

ロシア視点

モンゴルとロシアの関係については、様々な議論がある

1. 「モンゴルの圧政の影響を重視」する見方

(モンゴル帝国がロシアの諸都市を蹂躪し重い税を課した「タタールのくびき」など)

2. 「モンゴルの影響は残らなかった」との見方

3. 「どちらとも言えない」との「中立」の見方



問題意識

1. モンゴル帝国とロシアとの関係には、なぜ**複数の対立する見方**があるのか？
2. モンゴル帝国の朝貢国としての**ロシア諸侯の位置づけ**とは？
3. モンゴルの**ロシア統治の実態**はどのようなものだったのか？
4. モンゴルのロシア統治がその後の**現代ロシアに及ぼした影響**はあったのか？
5. 現代の**ロシアの行動を読み解く**ために、この**歴史から得られるヒント**はあるのか？

モンゴル帝国とロシアを巡る論争

ロシア視点

論争は占領された**ロシア側の主張のみ**が目立ち、
占領した側であったモンゴル帝国の研究はほとんど存在しない

主張者	主張
(1) 19世紀ヨーロッパ人	<ul style="list-style-type: none">● 「ロシア人は仲間ではない。ヨーロッパ人とは認めない!」● 「ロシアは一皮むけばモンゴルだ。遅れた後進国だ!」
(2) 20世紀のソ連の歴史家	<ul style="list-style-type: none">● 「(過去のヨーロッパ人の認識と違って) 我が国ソ連には一切モンゴルの影響など無かった!」
(3) ユーラシア派の歴史家	<ul style="list-style-type: none">● 「いや、実はロシアの全てはモンゴルの影響で始まった。それまでの美しいロシアはなくなったけれど、現在のロシアはモンゴルのおかげでもあるのだ。」● 「共に戦い、交流もしていたし、ロシアの公はモンゴル人の妻を迎え入れてもいたじゃないか。」● 「ロシアの知識人には沈黙のイデオロギーがあったのだ。」
(4) 現在 (栗生沢先生など)	<ul style="list-style-type: none">● 「どちらも言いすぎである。資料上の証拠は圧倒的に不足しており、イデオロギーからの水掛け論になってしまう。」● 「淡々と当時の歴史事象の回復につとめるべきだ。」

第2部 モンゴル帝国を滅ぼした宗教集団「紅巾党」

中国視点

紅巾党は白蓮教徒をベースとする**秘密結社**であった

1. 元の幅広い地域で**複数の結社**が独立的に広がり、それぞれが**独立または連携した反乱**が全土に広がった
2. 明の初代皇帝となった**朱元璋**は、紅巾党の一兵士から身を興した



問題意識

1. 元(モンゴル)を倒した勢力は、**なぜ宗教を軸とする秘密結社**だったのか？
2. 中国における**秘密結社と宗教の関係**は？
3. 中国の中世～近代**王朝と宗教の関係性**はあるか？
4. 現代の**中国の行動**を読み解く上で、**宗教と歴史の視点**は役立つのか？
5. 秘密結社は**なぜ生まれるのか**？

フィールドワーク計画

被害者としての「ロシア」

- ❑ **栗生沢 猛夫**（くりうざわ たけお）
（著書『タタールのくびき』など。北海道大学名誉教授）
- ❑ **宮野 裕**（みやの ゆたか）
（著書『「ロシア」は、いかにして生まれたか』など。岐阜聖徳学園大学教育学部 教授）

被害者としての「中国」

- ❑ **山田 賢**（やまだ まさる）
（著書『移住民の秩序』『中国の秘密結社』など。千葉大学副学長）
- ❑ **菊池 秀明**（きくち ひであき）
（著書『広西移民社会と太平天国』『ラストエンペラーと近代中国』など。国際基督教大学アジア文化研究所所長）

加害者としての「モンゴル」

- ❑ **赤坂 恒明**（あかさか つねあき）
（著書『ジュチ裔諸政権史の研究』ラシード=アッディーン『集史』翻訳など。内蒙古大学蒙古学学院蒙古歴史学系の特聘副研究員）
- ❑ **川口 琢司**（かわぐち たくじ）
（著書『ティムール帝国支配層の研究』『ティムール帝国』など。藤女子大学文学部講師）

年間スケジュール 春学期

回	日付	議題	発表者	文献調査・フィールドワーク	備考	議事録担当
1	2023/4/15	・自己紹介 ・今年度テーマ方向性			・春学期スケジュール確定 ・(参考文献)中国の秘密結社	
2	2023/4/22	・中国の宗教の位置づけ ・参考資料を読んだの問題意識発表(1)	高、日高、杉	「中国の秘密結社」	・メンバー確定 ・連絡用Classroom作成	
3	2023/5/13	・仮題『モンゴル帝国と宗教・秘密結社』 ・問題意識発表(2)	村上、須貝	「中国の秘密結社」	(参考資料) 論文起案例	杉
4	2023/5/20	・ゼミ長・副ゼミ長確定 ・問題意識発表(3)	高、福満	「中国の秘密結社」	・共同作業用Google Drive設定へ	須貝
5	2023/5/27	・問題意識発表(4) ・研究計画発表へ向けたスケジュールとアクションプラン	日高、小柳	「中国の秘密結社」ほか		小柳
6	2023/6/3	問題意識発表(5)		「中国の秘密結社」 「Empire's Twilightなど」		福満(予)
7	2023/6/10	新テーマ：ロシアとモンゴルについて議論		「タタールのくびき」など		大竹(仮予)
8	2023/6/17	研究計画発表の資料作成				高(仮予)
9	2023/6/24	研究計画発表				中西(仮予)
10	2023/7/1	中間発表準備				野中(仮予)
11	2023/7/8	中間発表準備				日高(仮予)
12	2023/7/15	中間発表準備				村上(仮予)
13	2023/7/22	中間発表準備				杉(仮予)
14	2023/7/29	中間発表準備				須貝(仮予)
15	2023/08/23-24	合宿・中間発表				小柳(仮予)

年間スケジュール 秋学期(未定)

回	日付	予定
19	9/23	↓秋学期日程は未定
20	9/30	
21	10/7	
22	10/14	
23	10/28	
24	11/4	
25	11/11	
26	11/18	
27	11/25	
28	12/2	
29	12/9	論文第一稿完成？
30	12/16	Active Learning祭
31	12/23	最終発表？
32	1/6	
33	1/13	
34	1/20	懇親会

参考文献・論文 (1)

1	.	山田 賢『中国の秘密結社』(講談社、1998)
2	.	東郷孝仁『紅巾の乱研究の動向と課題』(兵庫教育大学東洋史研究会『東洋史訪』第1号、1995年3月、1995)
3	.	- 『【世界史】宋と元の時代 モンゴル人の支配 5分でわかる! 寛大な統治の仕組み』(TryIt 高校世界史B、)
4	.	Bickers, Robert, and Tiedemann, R.G.『The Boxers, China, and the World』(Rowman & Littlefield Publishers、39275)
5	.	Own, David, and Heidhues, Mary F. Somers『Secret Societies Reconsidered: Perspectives on the Social History of Early Modern South China and Southeast Asia』(Routledge; 1st edition、34334)
6	.	Heckethorn, Charles William『"The Secret Societies of All Ages and Countries: Volume One" (1897)』(Independently published、43432)
7	.	Studysmarter『Decline of Mongol Empire』(https://www.studysmarter.co.uk/ 、)
8	.	- 『The Decline and Fragmentation of the Mongol Empire, 1256-99』(https://www.massolit.io/ 、)
9	.	Jackson, Peter『From Genghis Khan to Tamerlane: The Reawakening of Mongol Asia』(Yale University Press、2024)
10	.	- 『The Yuan dynasty in China (1279–1368) - Decline of Mongol power in China』(https://www.britannica.com/ 、)
11	.	Morgan, David『"The Decline and Fall of the Mongol Empire"』(Cambridge University Press、40087)
12	.	Bennett, H, Ryan『THE RISE AND FALL OF THE MONGOL EMPIRE: THE FALL DUE TO INTERNAL STRUGEL AND DISEASE』(https://www.academia.edu/ 、42844)
13	.	杉山正明『モンゴル帝国と長いその後』(講談社、2016)
14	.	寺島実郎『人間と宗教』(岩波書店、2021)
15	.	東郷孝仁『杜遵道と紅巾の乱——元末「紅巾」登場の背景』(兵庫教育大学東洋史研究会『東洋史訪』第3号、1997年3月、1997)
16	.	東郷孝仁『徐壽輝西系紅巾軍の内部構造——元末天完政権の体質と限界』(兵庫教育大学東洋史研究会『東洋史訪』第7号、2001年6月、2001)
17	.	野口鉄郎『明代白蓮教史の研究』(雄山閣、1986)
18	.	綾部恒雄 (監修), 野口鉄郎 (編集)『結社が描く中国近現代 (結社の世界史 2)』(山川出版社、2005)
19	.	綾部恒雄 (監修), 福田アジオ (編集)『結衆・結社の日本史 (結社の世界史 1)』(山川出版社、2006)
20	.	綾部恒雄 (監修), 福井憲彦 (編集)『アソシアイオンで読み解くフランス史 (結社の世界史 3)』(山川出版社、2005)
21	.	綾部恒雄 (監修), 川北稔 (編集)『結社のイギリス史 (結社の世界史 4)』(山川出版社、2005)

参考文献・論文 (2)

22	綾部 恒雄『クラブが作った国 アメリカ (結社の世界史 5)』(山川出版社、2005)
23	壇上寛『明の太祖 朱元璋』(筑摩書房、2020)
24	壇上寛『永楽帝 -華夷秩序の陥穽』(講談社、2012)
25	『秘密結社 世界を動かし続ける沈黙の集団』(日経ナショナルジオグラフィック社、2018)
26	杉山正明『モンゴル帝国の興亡<上>』(講談社、35205)
27	杉山正明『モンゴル帝国の興亡<下>』(講談社、35236)
28	Wikipedia『モンゴルのルーシ侵攻』(Wikipedia、)
29	Wikipedia『タタールのくびき』(Wikipedia、)
30	栗生沢猛夫『タタールのくびき ロシア史におけるモンゴル支配の研究』(東京大学出版会、2007)
31	Wikipedia『露蒙関係』(Wikipedia、)
32	MANAEV, GEORGY『「タタールのくびき」 モンゴル帝国のロシア侵攻・支配の実像』(Russia Beyond、43999)
33	MANAEV, GEORGY『The Mongol invasion was the reason Russia formed』(Russia Beyond、43999)
34	Halperin, Charles J『ロシアとモンゴル—中世ロシアへのモンゴルの衝撃』(図書新聞、39508)
35	Halperin, Charles J『Russia and the Golden Horde: The Mongol Impact on Medieval Russian History』(Indiana University Press、1987)
36	Halperin, Charles J『George Vernadsky, Eurasianism, the Mongols, and Russia』(Cambridge University Press、42762)
37	Perrie, Maureen『The Cambridge History of Russia: Volume 1: From Early Rus' to 1689』(Cambridge University Press、2006)
38	Curtin, Jeremiah『The Mongols in Russia』(Boston, Little Brown、1908)
39	Leo de Hartog『Russia and the Mongol Yoke: The History of the Russian Principalities and the Golden Horde, 1221-1502』(British Academic Press、1996)
40	Jackson, Peter『The Mongols and the Islamic World: From Conquest to Conversion』(Yale University Press、2017)
41	栗生沢猛夫『中世ロシアの法文化とモンゴル支配』(「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集, no. 24 (2008年): 1-24、2008)
42	新藤義彦『モンゴル・タタールのロシア支配』(アジア研究所紀要 4 (1977年): 129-50.、1977)
43	宮野 裕『世界史のリテラシー 「ロシア」は、いかにして生まれたか タタールのくびき』(NHK出版、45056)